



Title	関係文法とGB理論(1)
Author(s)	三藤, 博
Citation	études françaises. 1986, 21, p. 31-46
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/93673
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

関係文法と G B 理論 (1)¹⁾

三 藤 博

坂原茂氏は、坂原(1983, 1984, 1985)において、関係文法の枠組に基いてフランス語の諸構文の分析を行っておられる。その中でも、坂原(1985)では、関係文法の立場からするフランス語の分析ということだけではなく、関係文法の枠組自体に関しても要を得た明快な説明を加えておられる。そして、その説明では常に生成文法が念頭に置かれており、例えば或る箇所では、氏は“生成文法で許される概念、規則、原則をどのように組み合わせても、整合的な説明を与えることができない…(中略)…生成文法の枠組で、受益者昇格構文について、整合的説明が可能であれば、是非とも知りたいものである。”(坂原(1985-4))と述べておられる。そこで、本論文においては、坂原氏が分析の対象としておられるものと同じフランス語の構文を取り上げて、それらを生成文法、その中でも N. Chomsky の学派によって展開されている GB 理論の枠組に従って分析した後、その分析を坂原氏による関係文法の枠組からする分析と比較することを通して、GB 理論と関係文法という二つの理論的枠組自体の比較検討を行うこととした。

その際、関係文法の原則が GB 理論の“概念、規則、原則”とどのような対応関係に立っているかを示していくことになるが、その理論体系相互の比較を、フランス語の幾つかの構文を例として用いることにより、過度に抽象的なメタ理論的考察に終わらせることなく、ある程度までは具体的な検討作業として遂行していこう、というのが本論文の目的である。従って論述もこの目的に合わせ、フランス語の構文の分析から始めて、最後に

包括的な理論体系相互の比較に至ることとなろう。

以上で本論文の目標を明らかにしたので、以下に論述を進めていくこととしたいが、以下に目を通して下さる方々には、坂原(1985)を随時参照して頂ければ幸いである。もちろん本稿においても坂原氏の分析を比較の対象として祖述していくことになるが、スペースの関係等から十分に詳しい紹介を行うことは不可能であるし、また本稿はその場でもない。従って、是非とも坂原氏の分析に直接当たられることを希望する次第である。

最後に本論文の構成であるが、本稿執筆の段階で、坂原(1985)は連載継続中である。そして、氏の連載の第10回以降は使役構文を扱っておられる。この構文は GB 理論の枠組でも極めて多岐にわたる分析が提起されている複雑な分野であり、使役構文に関しては別に稿を改めて論ずるのが適当であると思われる。そして、関係文法と GB 理論との本格的な比較もこの使役構文の分析の比較を待って初めて可能となるものであるから、本論文を二つの稿に分けることとし、本稿においては、先ず考察を受益者昇格の構文と繰り上げ（上昇）の構文に限定することとしたい。従って、関係文法と GB 理論との理論面での比較は第二部において行うこととしたい。

1. 受益者昇格の構文

1.1

受益者昇格とは、もちろん関係文法の用語であって、本節で取り上げる構文を関係文法はそうのように分析しているわけである。

(1) J'achèterai un livre à Jean.

(1)は(2a)と(2b)との間で曖昧である。

- (2) a. 私はジャンに本を一冊買ってやろう。
b. 私はジャンから本を一冊買おう。

即ち, *à Jean* の部分が, (2a) では“受益者 (bénéfactive)”と解釈されており, (2b) では“出発点 (source)”と解釈されているわけである。この両義性は, *à Jean* を *clitique* に代えた(3)でもそのまま保持される。即ち(3)は(4a)と(4b)との間で曖昧である。

- (3) Je lui achèterai un livre.
(4) a. 私は彼に本を一冊買ってやろう。
b. 私は彼から本を一冊買おう。

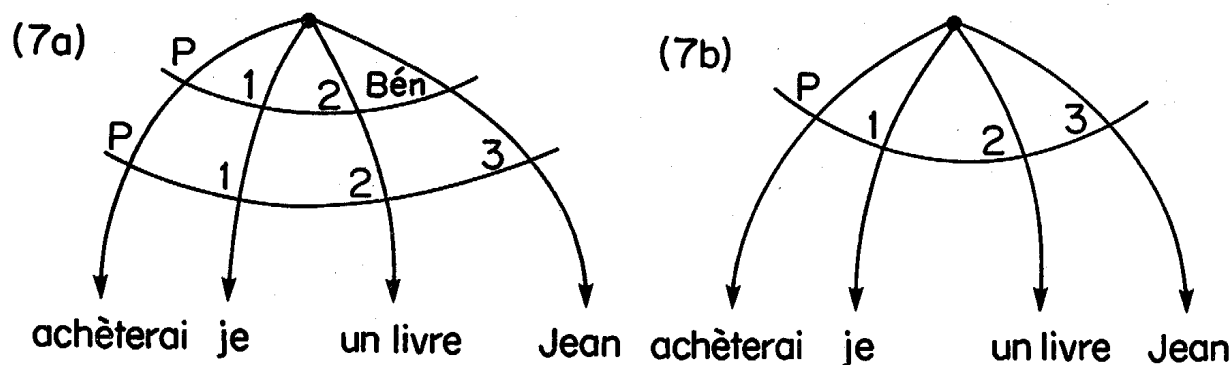
ところが、問題となるのは(5)が曖昧ではないことである²⁾。(5)の読みは(6a)のみであって、(6b)の読みはないのである。

- (5) Je lui achèterai un livre à Jean.
(6) a. 私は、彼にジャンから本を一冊買ってやろう。
b. 私は、ジャンに彼から本を一冊買ってやろう。

そこで、以下に先ず坂原氏による関係文法の枠組からの分析を紹介し、次いで本稿での GB 理論の枠組からの分析を提示することとしよう。

1.2 坂原氏による関係文法の分析

この現象を説明するために、坂原氏は概略以下のような議論を展開しておられる。先ず、(1)及び(3)の曖昧性に関しては、*à Jean* 及び *lui* が受益者であるか出発点であるかに応じて、それぞれ (7a) と (7b) という異なった層図表が与えられることによって説明される。



ここで注意すべき点は、第1層において間接目的語は受益者ではなく出発点であると考えられていることである。(7b) が第1層のみであるのに対し、(7a) が二層になっているのは、この前提があるからである。(7a) に見られるのが、“受益者の間接目的語への昇格”と呼ばれる過程である。ちなみに (7a) の第1層がそのまま表層化されれば、(8) を得ることとなる。

(8) J'achèterai un livre pour { Jean.
lui.

次に、問題の(5)の一義性であるが、これは、上に見た第1層の間接目的語に関する前提——即ち、それが受益者ではなく出発点であるということ——と、関係文法の二つの原則、層単一の原則及び失業原則とから、説明される。そこで、これら二つの原則を、坂原(1985)から引用しておこう(坂原(1985) 2-(4), (5))。

(9) 層単一の原則

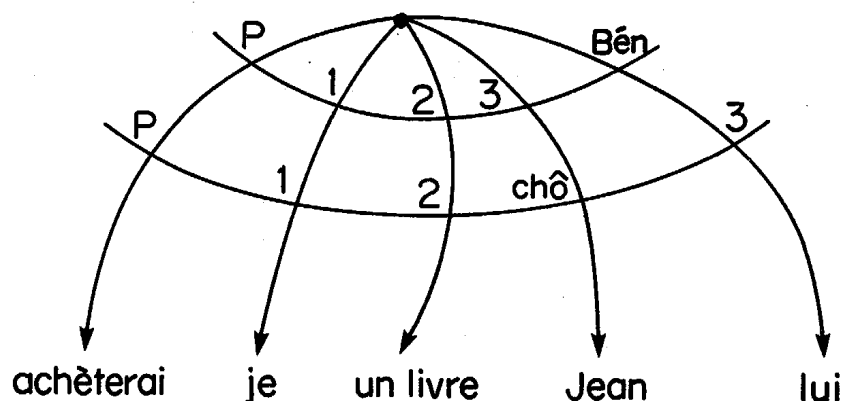
ある層において、ある文法項関係 (i. e. 1, 2, 3) を持つ名詞句は、多くとも1個である。

(10) 失業原則

ある名詞句 α が第 n 層で、文法項関係 RG を持ち、かつ別の名詞句 β が第 $n+1$ 層で RG を持つなら、 α は失業する。

これらに基き、(5)に対する層図表(11)が得られる。

(11)



(11)において、第1層で受益者であった *lui* が第2層で間接目的語に昇格し、失業原則によって *Jean* が第2層で失業しているのであり、その結果 *lui* が受益者、失業した *Jean* が出発点となる (6a) の読みが得られる。これに対して、実際には存在しない (6b) の読みを得ようとすれば、層図表 (11)において *Jean* と *lui* とを入れ換えなければならないが、*lui* は典型的に間接目的語を示す clitique であるから、*lui* が第2層において失業してしまうことは許されない。ということは、そういう読みが正しく排除される、ということである。

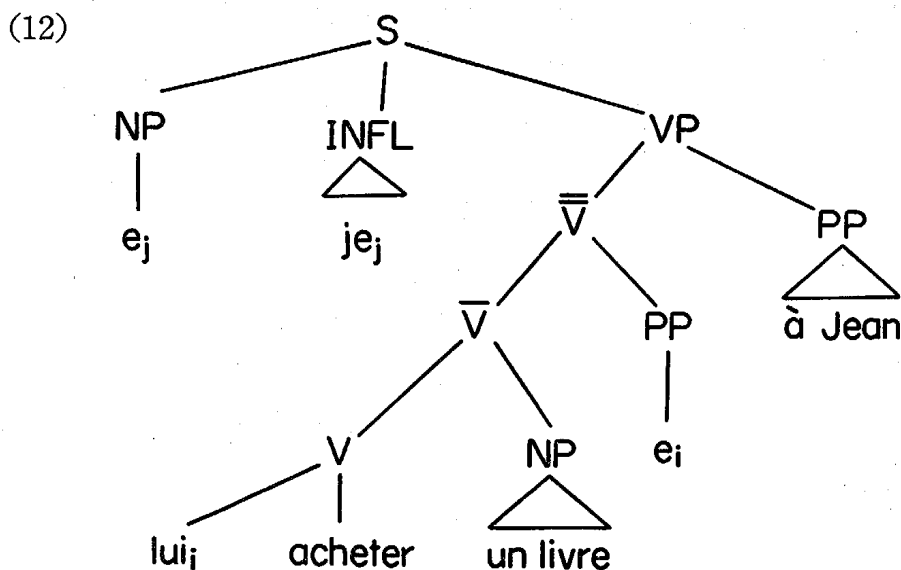
この分析は非常にエレガントであり、関係文法の有効性を実証している観がある。

1.3 GB 理論による分析

本節では、同じ構文に対する GB 理論による分析を提示する。

坂原 (1985) でもしばしば言及されているように、関係文法とは異なり GB 理論では、先行関係と支配関係によって定義される文の構造が説明において本質的な役割を果たす。従って、我々は先ずこの構文の構造を決定することから始めよう。

GB 理論の様々な要請から、我々はその構造を(12)の通りであると考え



(12)では、*lui acheter un livre à Jean* 全体を VP としているが、これはこの構文における受益者と出発点とがともに動詞 *acheter* によって下位範疇化されている要素であることから必然的に導かれる。即ち、この両要素とも locative などと異なり、S に直接支配される要素と見なすことは許されない。GB 理論では、レキシコン内に個々の動詞がどのような下位範疇化を行うかという情報が登録されているものとしている。そして、最近の理論では、この下位範疇化の情報のうち本質的なのは θ -ロールに関するものであり、これを θ -グリッドと呼んでいる。ここで、動詞 *acheter* の θ -グリッドは次の通りである。

acheter : [主題, (受益者), (出発点)]

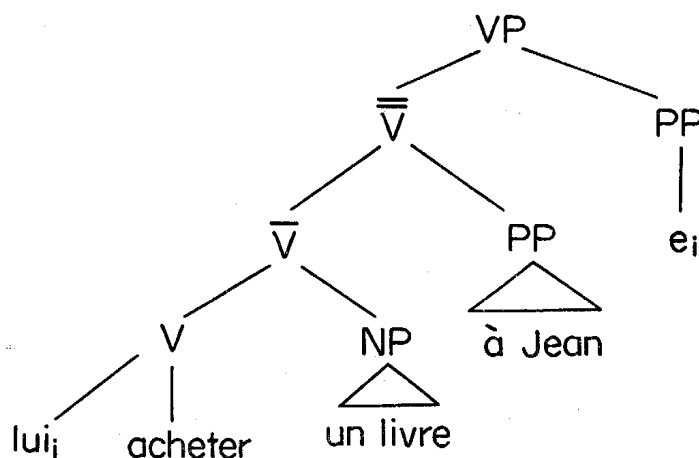
なお、このような θ -グリッドにおいては、各 θ -ロールの順序は問題にされていない。実際の文において、各 θ -ロールを担う要素がどのような順序で現れるかは、レキシコンの情報ではなく、GB 理論の下位理論である θ 理論と格理論とによって決定されるものと考えられている。

次に、受益者と出発点との構造に関してであるが、(12)の V に支配されている PP は典型的に間接目的語の位置であり、ここではその位置を受益

者 PP が占めている。これは、第1層において間接目的語は出発点であるとした坂原氏の前提とは全く逆の立場に立つことになる。しかし、間接目的語を受益者とすることは、決して不自然なことではなく、むしろフランス語の一般的な構文においても、またフランス語と似た言語である英語・ドイツ語その他においても間接目的語は目標 (goal) または受益者 (benefactive) を示すのが一般的であることから考えても、この構文に限って間接目的語を出発点と考える必要は、少なくとも GB 理論の立場からは、認められない。これらの考察から、(5)の構造は(12)であると結論づけることができる。

(5)の構造が決定されたので、次にその読みが(6a)に限られ(6b)が排除される理由を考えることとしよう。上の考察に従えば、(6b)の構造は(13)であり、問題は(12)が許され(13)が排除される理由に還元される。

(13)



(12)と(13)とを比較して直ちに気づくことは、(13)においては *lui* と *e* との関係づけ (construal) が *à Jean* を越えて行われているのに対し、(12)では *lui* と *e* との関係づけは *à Jean* を越えることなく、その内部で行われている、という点である。これは、いわゆる局所性 (localité) の現象の典型的な一例に他ならない。このことを以下でもう少し詳しく見てみよう。

Clitique の *lui* は *à*+NP に代わる要素である。最近の GB 理論では、

clitique の派生に関して, R. Kayne(1975) で始めて本格的に展開された, clitic placement rule による移動変形的派生を考えず, 基底から clitique の位置に生成されるとしているが, これはスペイン語等に見られるいわゆる clitic doubling の現象(空でない名詞句とそれに照応する clitique とが両方とも表層に現れる現象)が移動変形的派生では説明できないことがその最大の理由である。従って, clitic doubling の現象を示さない標準的フランス語に関しては, clitique の移動変形的派生を考えても, 基底生成を考えても, 本質的な相違はないと言えよう。ここでは, 基底生成の立場から, clitique と空の $\grave{a}$ +NP との関係づけについて, (14)のような制約が存在するものとする。

(14) 間接目的格 clitique に関する局所制約

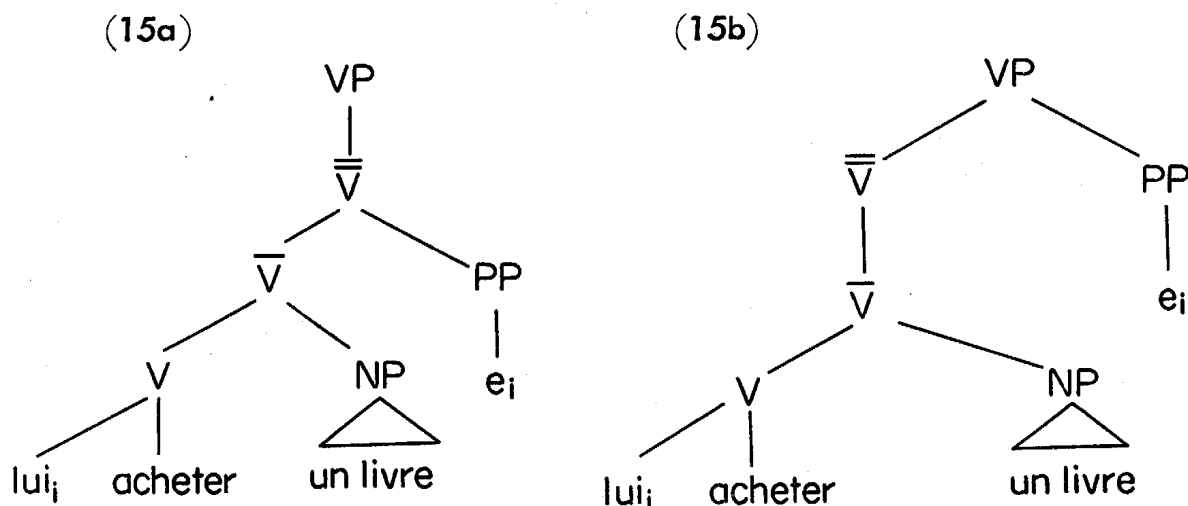
間接目的格 clitique と空の $\grave{a}$ +NP との co-indexing においては, 当該の空 $\grave{a}$ +NP が clitique に対して局所的でなければならない。ここで, 局所的であるとは, clitique と空 $\grave{a}$ +NP との間に他の $\grave{a}$ +NP が存在しないことである。

制約(14)の意味する所は, 単純に言うなら, clitique と関係づけられる空の $\grave{a}$ +NP が clitique に対して最も近い $\grave{a}$ +NP でなければならない, ということである。なお, (14)に現れる co-indexing とは“関係づけ”を形式化して示す GB 理論の用語である。

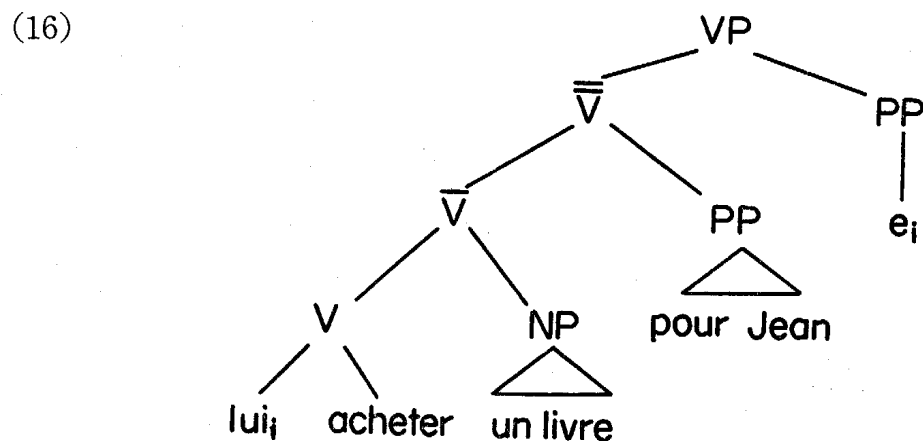
さて, 制約(14)により, (12)において *lui* と *e* とを co-index することは認められる。何故なら, 両者の間には, より形式的に言い換えれば両者を minimally に支配するノードである V の内部には, 他の $\grave{a}$ +NP 要素は存在していないからである。 $\grave{a}$ *Jean* は VP に直接支配されており, 従って *lui* と *e* との co-indexing を妨げることはない。これに反して, (13)では *lui* と *e* との両方を minimally に支配するノードは VP であり, もう一つの $\grave{a}$ +NP 形である $\grave{a}$ *Jean* もまたその VP に支配されている。この場

合には, *lui* と *e* との co-indexing は制約(14)により認められない。

以上で, (5)の一義性を制約(14)の存在に帰した。次に, (1)及び(3)が曖昧であることは, 例えば(3)の場合, 読み (4a) と (4b) とにそれぞれ対応する二つの異なった構造 (15a) と (15b) とが共に可能であることから説明される。



更に, この構文における受益者は *à*+NP だけではなく *pour*+NP でも表される。一方間接目的格 clitique が *pour*+NP に代わるという現象は観察されないから, *pour*+NP が存在していても間接目的格 clitique と *à*+NP との関係づけには影響を及ぼさない。このことから, (16)は制約(14)に抵触することではなく, その表層形(17)においては *lui* は出発点として解釈される。



(17) Je lui achèterai un livre pour Jean.

これで、制約(14)がこの構文に関する全ての事実を正しく覆っていることを見た。しかし厳密に言うならば、制約(14)は記述的な性格のものに留まっていると言わなければならない。本来は、より原理的な機構によって(14)自体を説明して初めて完全な理論的説明と呼び得るのである。しかし誠に残念ながら純粋に構造的な考察では(14)自体を説明することは極めて困難である。我々は目下の所は、制約(14)は *clitique* に関する一種の“知覚のストラテジー”であると考えておかざるを得ない。つまり、 $\bar{a}$ +NP 形から *clitique* として出られるのは、それが可能な位置が幾つか存在している場合には最も近い位置からの場合に限られる、という制約は、局所性の制約として決して不自然なものではなく、むしろ解釈の混乱を排除するための自然言語の機構としては極めて自然なものであると考えられる。

2. 繰り上げ構文

2.1 関係文法による分析

GB 理論で言う所の“繰り上げ (*montée*)”に対応するものとして、関係文法では“上昇 (*ascension*)”と呼ばれる操作が存在している。フランス語においてこの上昇操作が関与していると考えられるのは、(18)から(20)に至る三つの場合である（詳細は坂原 (1985-9) を参照のこと）。いずれの場合も、*b* が上昇操作を経た後の形である³⁾。

- (18) a. II semble que Céline ait été fasciné par le destin des héros
qu'il a créés lui-même.
b. Céline semble avoir été fasciné par le destin des héros qu'il
a créés lui-même.
- (19) a. On a trouvé que son écriture était provocatrice.
b. On a trouvé son écriture provocatrice.

- (20) a. Il est difficile de déterminer la cause de sa haine de l'écriture.
 b. La cause de sa haine de l'écriture est difficile à déterminer.

これらを整理して示せば(21)の通りである。

- (21) (18) 主語から主語への上昇
 (19) 主語から直接目的語への上昇
 (20) 直接目的語から主語への上昇

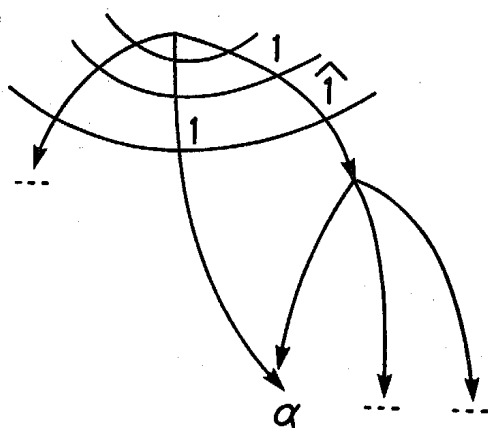
ここで、(18)、(20)のタイプの述語において、補文が主語の役割を果たしており、(19)のタイプの述語においては補文は直接目的語の役割を果たしていることを考えると、関係文法にとって非常に重要な位置を占める原則(22)が得られる。

(22) 機能継承原則

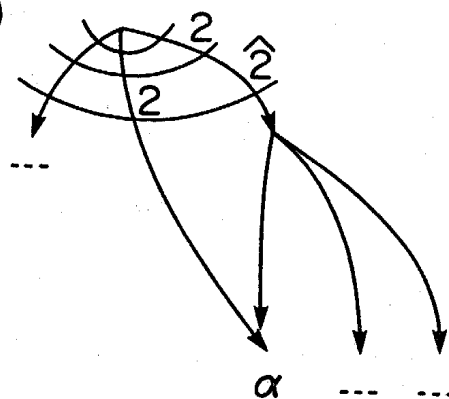
被上昇項 α の宿主 b が、主文 a に対して文法関係 RG を持つなら、 α は a に対し RG を持つ。

(22)において“宿主”とは補文全体のことであり、“被上昇項”とは、言うまでもなく上昇操作を受ける要素のことである。この原則により、(18)及び(20)のタイプは層図表(23)に、そして(19)のタイプは層図表(23b)によって一般化して示されることになる。

(23a)



(23b)



このように、(22)の機能継承原則は、関係文法の立場から上昇構文に関しての“言語学的に有意味な一般化”を捉えたものと言える。そこで、以下では、これらの構文に対する GB 理論の分析を概観した後、関係文法による取扱いとの間の比較を行うこととしたい。

2.2 GB 理論による分析

関係文法が上昇操作によって説明する(18)から(20)は、かつては生成文法においても繰り上げ変形によって説明されていた。というよりも、(18)から(20)をひとまとめにして繰り上げ変形で扱うべきであると最も熱心に主張していたのが、まさに関係文法の創始者の一人である P. Postal の Postal (1974)であったのである。しかし、生成文法の主流は、その後規則による一般化の道を進むことなく、幾つかの原則や独立した下位理論の協調によって説明を構築する所謂“モデュラー方式”が採られる方向に進み、その中で(18)から(20)に関しても異なった説明が提示されることとなった。これを受けて現在の GB 理論では繰り上げ変形で説明されるのは(18)のみであり、(19)と(20)とはそれぞれ相異なる説明が行われている。

その説明に本質的役割を果たすのが、上にも少し触れた下位理論である θ 理論と格理論とである⁴⁾。

θ 理論は、上にも触れた θ -ロールに関する理論である。 θ -ロールはかつて格文法などで考えられていた深層格の考えを継承したものであり、主語・動作主・目標・出発点などの θ -ロールが文中の名詞句に振り当てられる。これは、主として上にも述べたようにレキシコンに記載されている動詞の語彙情報に従って行われるのであるが、主語の位置に与えられる θ -ロール（例えば動作主）は動詞単独からではなく動詞句全体から与えられるものと考えられている。そして、このような個々の θ -ロール付与全体は(24)の所謂 θ -基準に従っていなければならない。

(24) θ —基準

θ —ロールが与えられる位置には、一つ、そしてただ一つの項 (argument) が占めていなければならない。また、項は必ず一つ、そしてただ一つの θ —ロールを持っていなければならない。

(24)が述べているのは、要するに、 θ —ロールと項との関係は一對一の対応関係になっていなければならない、ということに他ならない。

更に、 θ —理論とは独立しているがこれと密接に関連する原則として(25)の投射の原則がある。

(25) 投射の原則

レキシコンに記載された動詞の下位範疆化の情報は全ての表示のレベルで遵守されていなければならない。

(25)に言う表示のレベルとは、D—構造、S—構造及びLFを指している。従って、(25)により、これら三つのレベル全てにおいて、或る文に指定される構造は基本的には同じものでなければならない、ということが導かれる。

次に格理論であるが、この下位理論で最も重要な役割を果たすのは(26)の格フィルターである。

(26) 格フィルター

空でない名詞句は格を持っていなければならない。

また、フランス語や英語のような言語では、名詞句に格を与えることができるのは、主として動詞と前置詞である。

以下に、上に挙げた θ —理論と格理論とが、どのように(18)から(20)を説明するかを概観することとしよう。

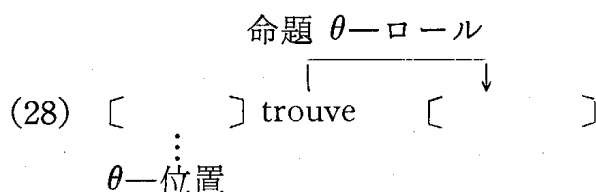
先ず、(18)のタイプに関して。このタイプの構文の θ —ロールの分布は

命題 θ -ロール

↓

(27) [$\vdots$] semble [$_s$ comp] [Jean avoir vu le film]]
 $\bar{\theta}$ -位置 $_s$

次に(19)のタイプに関して。このタイプの構文の θ -ロールの分布は(28)の通りである。



この場合にも *trouver* が $\bar{S}$ に与えるのは命題 θ -ロールである。この構文における *trouver* と直接目的語 NP を取る場合の *trouver* とはレキシコンにおいて別の語彙情報を与えられているものと考えられる（直接目的語 NP の場合、与えられる θ -ロールは主題である）。また、(27)と違って (28)では主文の主語の位置が θ -位置となっていることに注意されたい。(28)において、 θ -位置である主文の主語の位置に（空でない）名詞句が入り、補文が有時制文で普通に埋められれば、(19a) が得られる。次に問題となるのは (19b) の形であるが、(25)の投射の原則により、この場合においても θ -ロールの分布は(28)と同じでなければならない。つまり、この場合の例である(29)において *Jean gentil* の部分は構成素を成していることになる。

(29) Je trouve [Jean gentil]

そしてこの場合、項である *Jean* には(24)により何らかの θ -ロールが与えられなければならないが、これは *gentil* を一つの述語 (*prédicat*) と見て、この述語 *gentil* から与えられるものとする。次に問題となるのは(26)の格フィルターをどのようにして満たすかということであるが、これはこの部分が直接目的格の *clitique* で代えられることから考えて動詞の *trouver* から直接目的格が与えられているものと見なさざるを得ない。GB 理論内部の技術的理由からこの場合の *Jean gentil* の部分は $\bar{S}$ ではなく S であるとして、この格付与を可能にすることができる。従って結論として言うならば、(19b) のタイプにおいては繰り上げ変形は適用されていないことになる。

この GB 理論による分析のうち、(19b) の形に関しては、上の *Jean* に動詞 *trouver* から格が与えられるとすることによって、実質的には関係文法による分析と同じく *Jean* を *trouver* の直接目的語としている点に注意されたい。

次に(20)のタイプに関してであるが、この構文に関しては GB 理論内部で検討すべきと思われる問題が幾つか存在している。関係文法との比較のためにもこれらの問題点を解明しなければならないが、この点についての検討は第二部において行うこととし、甚だ未完結な形ではあるが、第一部の稿はここで終わることとさせて頂きたい。

(第二部に続く)

[注]

- 1) 本論文は、坂原茂氏によって提起されている関係文法によるフランス語の諸構文の分析を GB 理論からの分析と比較検討しようというのが成立の動機である。従って、そもそもの存在自体を坂原氏の諸論考(坂原(1983, 1984, 1985))に負っている。ここに坂原氏に深く感謝したい。
- 2) このデータは坂原(1983, 1984, 1985)において提示されているものである。
- 3) (18)から(20)の例文は、坂原(1985-8)の(1)から(3)をそのまま引用したものである。
- 4) 以下はこの両理論のスケッチに過ぎない。詳細は Chomsky (1981, 1985) を見られたい。

[参 考 文 献]

- 坂原 茂(1984) 関係文法とフランス語 (日本フランス語学研究会第61回例会における口頭発表)
- 坂原 茂(1985) 関係文法とフランス語 (「ふらんす」に1985年2月号より連載)
- Chomsky, N. (1981) *Lectures on Government and Binding*, Foris Publications
- Chomsky, N. (1982) *Some Concepts and Consequences of the Theory of Government and Binding*, MIT Press
- Kayne, R. (1975) *French Syntax*, MIT Press
- Postal, P. (1974) *On Raising*, MIT Press
- Sakahara, S. (1983) The Stratal Uniqueness Law and Indirect Objects in French, in *Kansai Linguistic Society* 3